釧路市教育委員会　令和４年第２３回１１月定例会会議録

１　日時：令和４年１１月２５日（金）１０時００分から１２時００分まで
２　会場：釧路フィッシャーマンズワーフＭＯＯ　２階　教育委員会室
３　出席者
　　岡部義孝教育長
（教育委員）
　　山口隆委員、種村俊仁委員、小出美貴子委員、籾山彩子委員
（事務局）
　　齋藤学校教育部長、工藤生涯学習部長、大山教育指導参事、早坂学校教育部次長、北澤北陽高校事務長、池田総務課長、小野施設計画主幹、森教育政策主幹、冨田総括指導主事、島スポーツ課長、鈴木動物園長、朴音別生涯学習課長
４　議事録署名人　　山口委員、籾山委員
５　傍聴人数　　０人
６　提出案件
【公開案件】
報告事項
（１）「学校・家庭・地域と共に考える教育懇談会」の開催結果について
（２）令和３年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査について
（３）大館市教育視察研修実施報告について
（４）学校の現状について

７　会議内容

【公開案件】 報告事項

（１）「学校・家庭・地域と共に考える教育懇談会」の開催結果について

（池田総務課長）

総務課から、報告事項（１）「学校・家庭・地域と共に考える教育懇談会」の開催結果について報告する。

１０月４日のコアかがやきを皮切りに、阿寒、音別地区を含め、１０月３０日の鳥取ドームまで市内６か所を会場に開催し、合わせて１０９名の皆さまに参加いただいた。今年度の教育懇談会は、「釧路市がめざす学校のすがた基本計画」の素案をテーマとして、教育長が資料を説明し、その後、行った意見交換についても、教育長が質問等に答える形で実施したところである。開催時間が２時間を超えた会場もあり、お越しいただいた皆さまからは、多くの貴重なご意見をいただくことができた。

この教育懇談会については、次年度においても、そのときどきに合わせたテーマを設定し、学校、家庭、地域それぞれの皆さまと意見交換を行う場として、開催してまいりたいと考えている。

（岡部教育長）

これらの模様は、ホームページに全編カットせずに動画で配信している。また、会場の主な意見はペーパーに記載してある。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

（山口委員）

最後の鳥取ドームの説明会に参加した。資料を見ても参加者の多くは反対の立場が多かったという印象である。しかし、それらの意見に対して教育長中心に教育委員会の意見を分かりやすく説明できていたということで、やってよかったと思う。説明内容については、与えられている情報で詳しく見れば、教育委員会の考え方を正しく受け止めてもらえる市民の方も多いのではないか、という印象を受けた。

【公開案件】報告事項

（２）令和３年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査について

（冨田総括指導主事）

教育支援課から、報告事項（２）文科省において毎年実施している、児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査に係る令和３年度の本市の確定値について報告する。

この調査については本年１１月１日をもって、確定値として確認されたところである。令和２年度のいじめ認知件数は 1,229 件で、昨年より小学校は 285 件、中学校では 22 件、計 307 件の認知件数減少となっている。また、不登校児童生徒数については 342 人で、昨年より小学校は 27 人、中学校は 20 人、計 47 人の減少となっている。出現率については全体で 3.35%、小学校では 1.55%、中学校では 6.63%となり、昨年度より下がってはいるが全道全国に比べると高い状況である。令和３年度の暴力行為ついては昨年度に引き続き０件である。

本市の不登校の要因、及び市教委としての取組みについても併せて報告する。不登校児童生徒の主たる要因は、小学校については生活リズムの乱れや親子関係等、本人や家庭に起因するものが多いことが特徴で、中学校については友人関係の構築、学習面や進路の不安等、学校に係る状況に起因する場合が多いと捉えている。昨年度と比較すると、学業不振、入学・転入学・新入学児童の不適応が生まれていると考えられている。生活環境の急激な変化については昨年よりも高くなっており、対応が必要になってくるのではないかと思っている。学習面については授業改善を進めているが、今後一層進める必要があることと、学校間のスムーズな接続が必要であると捉えている。生活リズムの乱れについては昨年度より下がっており、新型コロナの影響は大きいものの、少しずつ回復の傾向にあると思っている。しかし、不登校になった生徒は長期化する傾向がみられ、３０日以上の子が９０日以上となっていくこともあり、長期化しないように対策しなくてはいけないと思っている。

教育支援課としては未然防止の取組み、不登校児童生徒数改善の取組みを進めている。未然防止に関しては、不登校カルテというものを年に３回学校から提出してもらっている。年度途中でも不登校が顕著に表れてきた場合、随時出してもらっている。それによって不登校児童の家庭状況や、その子の身体的・精神的状況等も共有できて、我々も積極的に関わることができている。今年度より、長期欠席・不登校支援リーフレットを発行し、学校に配布している。学校での体制をしっかりと作って頂く必要があることから、今後は不登校の対応にはコーディネーターのような立ち位置の方を学校で作っていただくよう、お願いしている。不登校児童生徒改善に係る取組としては、これまでの取組に加えて、今年度から授業マイスターによる授業公開を行っていることから、授業づくりについては授業マイスターの７人の先生方に、積極的にかかわっていただいている。また、小中ジョイントプロジェクトを本年から開始している。小中学校の円滑な接続に向けて、学力面、生徒指導面、不登校も含めて連携するように進めている。居場所づくりという点では、青空学級とふれあい教室を段階的に機能再編しており、次年度から新しい形でスタートできるよう進めている。今後に向けては、ふれあい教室、学校、市教委の連携を強化していくこと、オンラインがコロナ禍で重要なツールになっていることから不登校児童生徒についてもオンラインを活用した学習補助を進めていく必要があると考えている。

（岡部教育長）

昨日、青少年問題協議会を開催し、同様の説明も詳しくさせていただいた。全国的に同じような傾向という中では、令和３年度の釧路市は減少したことは全国的な動きとは少し違うが、絶対数としてはまだ多い。なんとかして、子供たちの支援を進めていかなくてはいけな

い。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

（籾山委員）
　いじめの認知件数、暴力行為については、どのような調査方法を行っているのか。
（冨田総括指導主事）
　いじめに関しては、子供たちに対して年二回のアンケート調査を行っている。いじめを受けたことがあるかではなく、嫌なことをされたことはあるかという内容で、小中学校の全児童生徒にアンケート調査をしている。文科省の調査を道教委から送ってもらい、市教委で実施して集計している。それを先生方が見て、気づいている部分とアンケートを見て気づいた部分を把握しながら、組織的に対応している。子供たちが嫌な思いをした時点でいじめであるため、それをいじめとして捉え、学校として対応していると言うものである。その子供たちの訴えを認知件数としてカウントしている。不登校に関しては子どもたちの出欠状況を確認している。暴力行為に関しては、生徒指導のトラブル等を受けて、暴力行為があったかどうかを確認して、それぞれ調査票に書き入れている。
（岡部教育長）
　いじめの認知件数は、いじめの件数ではなく、放って置くといじめになりかねない、いじめの芽がこの件数である。この数字を否定的にとらえるのではなく、少しでも芽のうちに摘む。早期に察知して対応する、その数字だと認識して頂ければと思う。
（山口委員）
　教育長から説明あったが、昨日の議案説明の時にいじめも不登校も数が多い、それは全国・全道の比率からみても若干多いが、傾向として全国・全道が上昇しているのに対して釧路は減少傾向であると確認した。いじめに対して特効薬はないと思うが、市教委の行う６つの具体的な取り組みを地道に今後も進めていけば、減少傾向をさらに減少傾向につなげていけるという考え方であるか。
（冨田総括指導主事）
　特効薬はないため色々な手立てを打っていくが、まずは不登校気味の状況が起こっていることを把握して、学校がその子にどう対応していくのかという動きが大事だと思う。今年度初めて参事と指導主事で学校訪問し、不登校児童生徒ひとりひとりについて聞き取りを行い、学校としてどのような対応をしているかという場を持ったことで、学校もそれについて意識した、対応したというのが、大切なのではないかと思う。どの対策も大事で、漏らさずやっていくことが大事だと思う。
（山口委員）
　関連して、不登校コーディネーターを選任するとあり、文科省の考え方の中でも担任ひとりにすべて負わせるのではなく、学校内に役割分担できる専門的なノウハウを持った人を配置しなくてはいけないといった方向性がある。不登校コーディネーターをその中の一人とし

て配置したときに懸念されるのは、コーディネーターに任せておけばいいという雰囲気が学校で蔓延してしまい、本末転倒になってしまうこと。あくまでワンチーム、組織的に一人の子供に関われるような体制にしていくことが重要だと思うが、不登校コーディネーターの位置づけはそのような考え方でよろしいか。

（冨田総括指導主事）

その通りである。学校の対応をしていると、その子をよく知る担任の先生が中心となって動くことは重要であるが、日常的に家庭訪問したり電話したり状況確認することを担任の先生だけに負わせるのではなく、コーディネーターがその子に関する会議の招集や書類づくりをするというような部分で組織として動くことで、子供が学校に来た時も受け入れ体制としては良いのではないかと考えている。

（山口委員）

もう一つ念押しで、教育委員会の立場から、不登校児童生徒への対応として学校間格差を感じるという実態があった場合、コーディネーターの会議を教育委員会招集で開き、このような認識で各学校、転校策がないように対応して欲しいという意味でもコーディネーターは使えると思う。

（冨田総括指導主事）

そのように思う。

（種村委員）

釧路の不登校やいじめが減っている原因、どのような経過でいじめが減ったのかというような成功体験を具体的に公表することでいじめや不登校が減っていくと思うのだが、そのような手段はとっていないのか。

（冨田総括指導主事）

特効薬はないし、個々によって不登校の原因は違うため、まずはいじめを受けた子たちや不登校状況になった子たちに寄り添い、状況を学校として把握する。そこから、教育委員会も入りながらその子たちに対する手立てを検証していく。例えば学校ではない場所で所属につないでいくというシステムができていることが減少につながっているのだと思う。

（岡部教育長）

減少傾向にはあるが、激減はしていないため、絶対数はまだまだ多い。そのため、成功体験を語るまでの進度ではなく、取り組みの途上の様な気がする。

（小出委員）

学校全体で生徒を支援していく体制ができることで、不登校のコーディネーターを置くことはすごく良いことだと思うが、「選任し」と記載しているということは学校の先生の中から選ぶということか。

（冨田総括指導主事）

そうなっていくと思う。

（小出委員）

不登校の子供に対応するには、それに関する知識がないと難しいのではないかと、いろい

ろ見てきて思う。対応を間違えると、良かれと思ってしたことをきっかけに、さらに学校へ来られなくなる子供や、先生に言われたことが傷になってしまう子供がいるため、そのようなことが起こらないようにするためには、やはり知識が必要。どのようにその先生を選ぶのか、また選ばれた後の研修やその先生が対応するためのスキルアップの手立てを考えているのか教えていただきたい。

（冨田総括指導主事）

不登校コーディネーターを置く前段として、リーフレットを作った。これだけ数が多くなってくると、どのクラスにも不登校気味や不登校児童生徒がほぼ確実にいる。ということは、コーディネーターの先生だけが知識を持って動いても仕方がなく、どの先生も不登校児童生徒に対する対応を分かってなくてはいけない。手立て等をみんなで確認する、音頭取りをするような先生がまずコーディネーターになり、そのコーディネーターと我々が集まって研修会をして情報を渡す、そしてコーディネーターから学校の先生に情報を渡すというシステムで、みんなが不登校に適切な対応ができるようになるというのが、大事なのかと思う。特定の先生が高いレベルの知識を持っていることよりも、みんながある程度の知識を持っていることが必要で、コーディネーターにはそのリーダー的な役割を担っていただければよいと考えている。選任は校長先生が行う。

【公開案件】報告事項

（３）大館市教育視察研修実施報告について

（冨田総括指導主事）

教育支援課から、報告事項（３）学力向上に係る視察研修、大館市教育視察研修について報告する。

視察研修には予定通り９名の職員、先生６名、指導主事３名が参加した。１１月８日から１１日までの日程で大館市へ向かった。１１月８日に出発し、夕方に大館市に入り、９日の午前中には大館市立下川沿中学校という小さめの中学校へ全員で訪問し、特別支援学級も含め、全学級の授業に参加させていただいた。教科としては、英語・理科・数学・社会の授業であった。その後、学校経営や校内研修などについて、学校長や教頭先生、教務主任の先生より説明を受けた。授業では、生徒の発言を上手に引き出すように授業を進めていこうとする先生の姿勢が印象的であった。特定の生徒の発言のみで授業を進めるのではなく、多くの生徒に発言させるように問い返したり、時には一度立ち止まらせたり、考えさせながら授業を進めていくことを大切にしていた。学校経営に関しては、校長先生に大変分かりやすく学校経営のビジョン等についてお話しいただいた。学校で目指す生徒像について全教職員の共通理解を図り、具現化を目指した教育活動が実践されていた。加えて今回は大館市の教育委員、社会教育委員の皆さんもその場に同席されており、私たちと同じように学校経営や授業に対して質問されたり感想を述べられたりしていた。話の中から、教育委員による生徒への講演会や、教育委員が教育活動に積極的に活動し、ふるさとキャリア教育に参画されている

ことがうかがえた。午後からは３校に分かれて、大館市の市教研という研究会の道徳部会と特別活動部会に参加した。ここでも子供たちが積極的に授業に参加する姿が印象的であった。また、授業後の研究協議では、参加された先生方が授業の改善点などを厳しく指摘し、熱心に議論されている様子を目の当たりにした。年齢を問わず、どの先生も真摯に授業研究に取り組んでいた。

翌１０日の午前中には大館市立南小学校に全員で訪問し、５つの授業に参加した。どの学年でも自分の考えを発言することを大事にしていた。このような授業スタイルは指導を徹底し、積み重ねているからこそ、中学校においても多くの子供が発言するようになっていると感じた。また、授業中に急な大雨があったが、低学年の子供たちは一切雨を気にすることなく学習に向かっていたことが印象的であった。学びに向かう姿勢が確立されていることに、先生方も驚いていた。また、学校経営に関する説明では下川沿中学校同様、明確でわかりやすく学校のビジョンをお話しいただいた。隣接する小学校と連携して、目指す子供像を共有しながら指導に当たられていることが参考になった。まだまだ学校を見ていたかったが午後からは大館市を離れた。9日の夜は高橋教育長、大館市教育委員会の方々と夕食をともにし、これまでの大館市での取り組みの様子について、また、教育委員会としてどのように学校と関わってきたのかを直接伺うことができた。今回視察研修に参加させていただき、先生方も我々も大きな刺激を受けて帰ってきたところである。

私の感想になるが、学校長の強いリーダーシップのもと、全教職員が同じ方向性、ベクトルがそろっていて、その中で子供たちの指導に先生方が当たっていること、また低学年のうちからしっかり考える、進んで発言するという学び方を徹底している、個々の子供たちの考えを大切にしながら授業を進めていくことが大切だと、授業を見ながら感じた。子供ももちろんだが、先生方も非常に元気であることに尽きると思う。昨日も授業マイスターとオンラインで交流しながら、今回の研修を振り返っているところである。管理職の校長会、教頭会のみならず、先生方の学力向上セミナーにおいて十分に還元していきたいと考えている。今後は我々の釧路市としての目指す授業像を構築しながら、教育行政に反映していきたいと考えている。

（岡部教育長）

授業マイスターの先生に行きと帰りに訪問いただいたが、特に行きの時の表情はガチガチで、ただ帰ってきてからはここで学んだことを釧路市全体の底上げに活かしていきたいという決意をしていたため、非常に良い機会であったなと思った。次回は逆に大舘の本場のマイスターを釧路に呼んだりすることも必要かなと思っている。授業マイスター派遣第一弾としては大成功だった気がする。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

（山口委員）

次の報告の中に関連するものがあるので、あわせて発言をしたい。

【公開案件】報告事項
（４）学校の現状について

（大山教育指導参事）
「信頼」に基づいて説明する。
すでにコロナの第８波に入ったとの報道もあるが、実際にコロナの感染状況は悪化している。各学校では、学級閉鎖の基準や濃厚接触者の復帰の基準に基づいて対応しているが、予断を許さない状況になっている。そのような中で、公開研究会や計画訪問が予定通りに開催されている。参加していただいている教育委員の皆様に感謝を申し上げる。計画訪問については小中ジョイントとして、中学校区の小学校同士の訪問や小学校と中学校相互の授業参観をすることができた。指導主事からは「授業後の研究協議で他校の教員が加わることで協議内容が深まった」と報告を受けている。公開研究会では、参加者が多いため密にならないように工夫していただき感謝をした。ただ、研究指定校の公開授業の質の向上が課題として挙げられた。来年度からは、小中ジョイントの一環として中学校区を指定して、授業改善に特化し、中学校区で児童生徒が９年間同じ授業スタイルで学ぶことができるよう、その成果を公開できるような公開研究会にしたいと話を進めている。
中身の１点目は授業改善で、授業づくりの基礎基本を理解していないため、授業改善に至らないのが現実のようである。各学校も昨年度に比べて授業改善をしようという意欲は伝わるが、従来の教え込みの授業の中で「話し合って」と言っても話し合うわけはなく、グループを作ってもタブレットを打って話し合いをしなければ意味がないというようなことを、校長先生から指摘・フォローしていただきたいという話をしている。特に中学校の教員は、教育実習でも、初任者の時も、授業について指導されたことがなく、優れた授業を見る機会もなかった、という環境で育っていることが大きな原因のように感じる。授業改善に向けて校長先生と頑張っていかなくてはいけないと感じている。
２点目は、社会福祉協議会の出前授業について、コロナの前は多くの小中学校から出前授業のお願いがあったが、コロナ禍になって激減したようである。感染予防と体験活動の両立ができるように工夫しているため、出前授業を活用するようにお願いした。
３点目は小中ジョイントの進捗状況について、すべての取り組みが初めての学校が多く、今年度はとにかく実践してみることが大切で、ある意味「試行」のレベルで進めていた。今年度の反省を生かして、来年度から本格的な実施になるということで、今年度いろいろと気づいたことがあると思うが、特に校長先生方の意識改革が重要になるという話をした。子供たちの９年間の成長に責任をもつということは、校区内の小学校・中学校に取組の差がなくなることが大前提になるため、これまでのように「自分の学校に口を出してほしくない」とか「自分の学校は良いから大丈夫」と思うことが進まない原因になる。これまでの校長のイメージを捨てて、視野を広く、協調性や協働性が必要になるという話をした。また、小学校同士の連携が大切であると今回分かった。小学校同士の格差が、中学校の授業の妨げになる

ということもあるため、それも併せて説明をした。冬休み明けには、年間の取組成果をまとまたいと考えているとお願いした。

4 点目は、教職員人事について、釧路市の課題に人事の停滞がある。これは、道教委の仕事であるが、市教委としても人事が円滑に動いて風通しが良くなるように協力したいと校長先生に伝えている。

最後に、その他のお願いとしてキャリアノートの件、授業時数の件、定年延長により懸念される影響についてお願いした。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

（山口委員）

マイスターの先生方中心に引率の指導主事の先生、大舘に行って大変収穫の多い視察であったとの報告を受けた。ぜひこれを釧路市に還元していただきたいと思うため、今後に期待したい。我々も釧路市のマイスターの授業を見させていただき、今言われている主体的で対話的で深い学びという部分で、マイスターの先生の言う対話的という場面設定も、ワンパターン化しているのではないかと思う。まず子どもたちに考えさせ、その後、隣近所で交流という設定をして、マイスターの先生の日ごろの生徒指導のおかげで活発に活動している授業を見せていただいた。成績中位と下位の子供にとっては非常に有効な場面設定で、自分の考えを述べる、相手の意見を聞くことによって、自分の思考が深まることはこの授業で実現できていると思った。しかし成績上位の子供たちにとって、その形の交流だけで深い学びが保証されているのかという部分では、少し我慢している、周りに付き合っている成績上位の子供がいるのではないかと、釧路市のマイスターの授業を見て感じた。学力向上推進委員会の方々の今後の課題として、成績上位の子供に対話的な深い学びを保証できるような授業を模索していく必要があるのではないかと思う。この前、芦野小学校の校長先生と話していて、子供たちのオーバーアチーバー、バランスドアチーバー、アンダアチーバーの話題になったとき、湖陵高校に行く子供たちはオーバーアチーバーのレベルまではいかなくとも、その子の能力や可能性を含めて、だいたいバランスを取れたような能力まで引き出して高校に送り出せているのか。湖陵に行く子供たちは、義務教育が終わった時点でアンダーチーバーのまま湖陵に行っている可能性はないのかということを考えたときに、対話的な深い学びという部分で一工夫あってよいのではないかと思う。それを大舘に行って、見つけてこられたのかを知りたい。

（冨田総括指導主事）

直接的な回答にはならないかもしれない。昨日、一時間半くらい今後についてのことをオンラインで振り返りをしたときにマイスターたちが、一番は自分の力がまだまだという発言をしていて、すごいと思った。マイスターたちは自分のクラスを持っているため、お互いの授業に出ていないという話であった。まずはそれを行わなくてはいけないし、どこかの学級に乗り込んで出前授業をするなど、自分たちの力を上げなくてはいけないと言っていた。山

口委員のおっしゃる上位の子供たちに対する授業への回答にはなっていないが、自分たちが力をつけて引っ張っていかなくてはいけないという気持ちにはなっている。大館へ行って感じたことは、下川沿中学校で行っていた取り組みとして、子供たちが授業を見あうということをやっていた。子供たちがこういう授業が本来の授業であると、先輩たちが学び合いをしている姿を子供たちが見ることで、考えが深まるということを知り、１年生がそういう授業になるように子供たち自身で工夫する。下川沿中学校ではそのような授業スタイルが定着しており、それにもマイスターたちは食いついていた。先生たちの力を上げるのもそうだが、子供たち自身の力を上げるというのも大事だと分かった。いろんな意味で吸収した視察であった。

（山口委員）

帰ってきて冨田総括指導主事、渡部指導主事とも話して、釧路のマイスターの先生の授業力と、大館の一般的な先生の授業力に差はなく、釧路のマイスターの先生の方がスキルの高い部分もあるという話を伺った。決定的に違うのは、釧路市の場合、特に中学校は一人の先生が頑張っているが、ほかの先生方は同じ方向を向いて子供たちに向き合っているかというとまだ課題が多い。決定的に違うのは、全ての先生が同じ方向を向いて同じ授業改善の方向に進んでいるということは、子供たちの鍛えられ方で決定的に差が出る。そこに釧路と大舘には中学校で差があるのではないかと思う。今後、マイスターの先生が周りも巻き込んで、全体で子供たちに関わっていこうというのが、釧路市の特に中学校での大きな課題である。

（冨田総括指導主事）

ただ、マイスターの先生は一般の先生である。一般の先生が学校の４０人、５０人の先生方にどれだけ還元できるかというのは難しいため、やはり管理職だと思う。管理職の先生がどれだけそのような授業をど真ん中に置いた経営をしていくか、マイスターの先生が自分の考えを出しやすい環境を作るかによって、学校の授業は変わってくると思う。

（山口委員）

今、冨田総括指導主事がおっしゃったように、管理職の姿勢や関わりが肝になると思う。機会があれば校長先生方に話してみようと思うが、自分の学校で最も快適な場所はどこかと聞いてみたい。校長室が一番快適な場所が校長室と答える場合は、その学校の先生方は活性化しないと思う。一番快適な場所が、子供たちと関わっている時や、子供たちに関することで職員室で先生たちと会話している時が、一番生きがいを感じる快適な場所であるとすべての校長先生が答えられるようになれば、釧路市もいろいろと問題になっている中学校も活性化していくのではないかと思う。ぜひこのことを校長先生に話したいと思っているが、どうであるか。

（冨田総括指導主事）

校長先生が授業を語れる方々であって欲しいと思う。今後、校長先生になっていく教頭先生たちにも管理職像を伝えていかなくてはいけないと思う。

（小出委員）

冨田総括指導主事の話を聞いて思ったことであるが、子供たちがほかの子供たちの授業を

見て学ぶというところで感動して、子供は先生や親からこうしなくてはいけないと言われることよりも、友達同士で見て学び合うことの方が考えて行動できる。やってはいけないと言われるよりも、自分事として友達とのかかわりの中で学んでいく方が身につくなと見ていて思う。そのため、釧路でもそのようなことができれば、子供たちが成長できるのではないかと思った。釧路にも子供たちをこうしたいというポリシーを持って行動する、話していて素晴らしいと感じる先生もいるため、そのような先生がもっと増えればいいなと思う。

（冨田総括指導主事）

これまでも例えば先輩の合唱を聞いてすごいなと感じているシーンはたくさんあり、行事についてはあるが、授業や生活態度に置き換えても同じなのかなと思う。私が北陽中学校というところ訪問した際、そこの校長先生は振る舞いを大事にしていて、制服を着ていなくても北陽中学校の生徒だと分かる振る舞いを身につけさせていると言っていた。上級生がそのような振る舞いをしていると、下級生はそれに続いていく。

（岡部教育長）

大館を見ての感想としては、大舘の授業は全部の主役が子供であり、先生が主役になっている授業は一つもなかった。そこが釧路市との違いかなと思った。

（山口委員）

大山教育指導参事の説明の中にあった小中ジョイントの進捗状況にかかわっての話で、前鳥取中が校校長と話す機会があった。現在私は昭和に住んでおり、鳥取小中のコミュニティスクールの委員として関わっている。鳥取中学校の一年生を迎えるときに、昭和小と鳥取小と新陽小を迎え入れるが、入学したときに新陽小の子供たちがかわいそうだと言っていた。小集団で６年間生活してきた子供たちが、鳥取小と昭和小からたくさん来ている中にポツンと居て、自分の居場所、ポジションを作るまでに時間がかかってしまい、その間に登校を渋る子供が出てくる可能性も大きいと言っていた。今回の学校のあり方で小学校同士の統合は据え置きになったが、それが無くてもジョイントプロジェクトの中で新陽小と鳥取小高学年の色々な場面での交流学習を実現できれば、中学校に入学した段階で、新陽小出身の子供たちは鳥取小の数多くの友達を作って鳥取中学校に入学できるため、助かる。ぜひ鳥取小と新陽小の高学年で授業や遠足、学校行事で活動を共にする場面を作ってあげることが、さきほどの説明で小学校同士の連携が非常に重要という話があったが、具体的な一つの例として実施できれば、例えば武佐小高学年と湖畔小、清明小と交流させることができるとかなり違ってくると思う。

（大山教育指導参事）

今ご指摘を受けたところは動いており、新陽小の校長先生が今年鳥取小へ行ったため、新陽を誘ってくれと指示している。鳥取小でいろいろ関係協議の問題を行っているので、その時に声をかけてもらうよう話はしている。武佐小については、清明小の校長と合同でそれぞれ進めている。

（山口委員）

子供たちにとってどうなのかという視点で考えると、そのような仕掛けはもっと積極的に

やるべきだと思うため、よろしくお願いしたい。